

待降節第3主日礼拝説教「お待ちしましょう」

日本基督教団石神井教会 2016年12月11日

【旧約聖書日課】士師記 13章2～14節

²その名をマノアという一人の男がいた。彼はダンの氏族に属し、ツォルアの出身であった。彼の妻は不妊の女で、子を産んだことがなかった。³主の御使いが彼女に現れて言った。「あなたは不妊の女で、子を産んだことがない。だが、身ごもって男の子を産むであろう。⁴今後、ぶどう酒や強い飲み物を飲まず、汚れた物も一切食べないように気をつけよ。⁵あなたは身ごもって男の子を産む。その子は胎内にいるときから、ナジル人として神にささげられているので、その子の頭にかみそりを当ててはならない。彼は、ベリシテ人の手からイスラエルを解放し救いの先駆者となる。」⁶女は夫のもとに来て言った。「神の人がわたしのところにおいでになりました。姿は神の御使いのようで、非常に恐ろしく、どこからおいでになったのかと尋ねることもできず、その方も名前を明かさなませんでした。ただその方は、わたしが身ごもって男の子を産むことになっており、その子は胎内にいるときから死ぬ日までナジル人として神にささげられているので、わたしにぶどう酒や強い飲み物を飲まず、汚れた物も一切食べないようにとおっしゃいました。」⁸そこでマノアは、主に向かってこう祈った。「わたしの主よ。お願いいたします。お遣わしになった神の人ももう一度わたしたちのところに来させ、生まれて来る子をどうすればよいのか教えてください。」⁹神はマノアの声をお聞き入れになり、神の御使いが、再びその妻のところに現れた。彼女は畑に座っていて、夫マノアは一緒にいなかった。¹⁰妻は急いで夫に知らせようとして走り、「この間わたしのところにおいでになった方が、またお見えになっています」と言った。¹¹マノアは立ち上がって妻について行き、その人のところに来て言った。「この女に話しかけたのはあなたですか。」その人は、「そうです」と答えた。¹²マノアが、「あなたのお言葉のとおりになるのであれば、その子のためになすべき決まりとは何でしょうか」と尋ねると、¹³主の御使いはマノアに答えた。「わたしがこの女に言ったことをすべて守りなさい。¹⁴彼女はぶどう酒を作るぶどうの木からできるものは一切食べてはならず、ぶどう酒や強い飲み物も飲んではならない。また汚れた物を一切食べてはならない。わたしが彼女に戒めたことは、すべて守らなければならない。」

【福音書日課】マタイによる福音書 11章2～19節

²ヨハネは牢の中で、キリストのなされたことを聞いた。そこで、自分の弟子たちを送って、³尋ねさせた。「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」⁴イエスはお答えになった。「行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい。⁵目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。⁶わたしにつまずかない人は幸いです。」⁷ヨハネの弟子たちが帰ると、イエスは群衆にヨハネについて話し始められた。「あなたがたは、何を見に荒れ野へ行つたのか。風にそよぐ葦か。⁸では、何を見に行つたのか。しなやかな服を着た人か。しなやかな服を着た人なら王宮にいる。⁹では、何を見に行つたのか。預言者か。そうだ。言っておく。預言者以上の者である。」

¹⁰『見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、あなたの前に道を準備させよう』と書いてあるのは、この人のことだ。¹¹はっきり言っておく。およそ女から生まれた者のうち、洗礼者ヨハネより偉大な者は現れなかった。しかし、天の国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である。¹²彼が活動し始めたときから今に至るまで、天の国は力づくで襲われており、激しく襲う者がそれを奪い取るうとしている。¹³すべての預言者と律法が預言したのは、ヨハネの時までである。¹⁴あなたがたが認めようとするれば分かることだが、実は、彼は現れるはずのエリヤである。¹⁵耳のある者は聞きなさい。¹⁶今の時代を何にたとえたらよいか。広場に座って、ほかの者にこう呼びかけている子供たちに似ている。

¹⁷『笛を吹いたのに、踊ってくれなかった。葬式の歌をうたつたのに、悲しんでくれなかった。』

¹⁸ヨハネが来て、食べも飲みもしないでいると、『あれは悪霊に取りつかれている』と言い、¹⁹人の子が来て、飲み食いすると、『見ろ、太食漢で太酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ』と言う。しかし、知恵の正しさは、その働きによって証明される。」

飼い葉桶の幼子のもとへ参じるために

アドヴェント・キャンドルの三本目のロウソクに火が点りました。この三本目のロウソクを、最近の多くの教会のやり方に倣って、他のロウソクと同じ「紫」色ではなく、「ピンク」色のもので用意いたしました。正確には「バラ」色です。「喜び」を表す色だとされてきました。待降節第3主日を「喜びの主日」と呼ぶ古くからの教会の習慣に従って、「喜び」を表す「バラ」色のロウソクが用いられるようになったのです。

待降節第3主日の「喜びの主日」に、教会は古くから、フィリピの信徒への手紙4章4節5節の御言葉を告げて礼拝を始めてきました。「主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。あなたがたの広い心がすべての人に知られるようになさい。主はすぐ近くにおられます。」わたしたちの聖書日課でもこの日に定められている御言葉ですが、今日の礼拝では朗読を省略してしまいました。御子のご降誕を待ち望むアドヴェントの期節、主がすぐ近くにまでおいでくださっていることを知るならば、主において、主に結ばれた者として、常に喜びを抱く者として生きることができる。喜びを心に確かに抱く者として、人々の中にあって、その広い心を示すことができる。広い心をもって、人々のことを、家族や友人ばかりでなく、多くの名も知れない隣人のことをも、喜び受け入れることができるでしょう。そう、使徒パウロの告げる勧めを、わたしたちは、この「バラ」色のロウソクの照らす光と共に、心に留めることにいたしましょう。

今年は、カレンダーの関係で、待降節第4主日までしっかり「アドヴェント」の祈りに集中して歩むことができます。ただし、その分、クリスマスの祝いは一度に集中してやってきます。23日の教会学校クリスマスが金曜日、翌土曜日が24日でクリスマスイブの聖夜礼拝、そして25日クリスマス当日に日曜日の降誕祭礼拝を祝います。今年の聖夜礼拝は、たくさんの聖書朗読とクリスマスキャロルで降誕物語を心に留めるときにしたいと、準備を始めました。皆さんにはもちろん、普段教会に来る機会の少ない方にも親しみやすい礼拝になるはずですから、一人でも多くの方をお誘いしておいでいただきたいと願っています。それにも増して皆さんにおいでいただきたいのは、教会学校クリスマスです。子どもたちのためのプログラムですが、その中で降誕劇ページェントを含む礼拝をいたします。これも、聖書朗読とキャロルで降誕物語を綴っていくものです。その礼拝に、ぜひ皆さんも加わって、一緒に祝っていただきたいのです。そして、場合によっては、その礼拝の中で子どもたちと一緒に、降誕物語の中の登場人物の一人となっていたいただきたいのです。

「大人が子どもと一緒に劇をするなんて、おかしいでしょう」と思われる方もあるかもしれませんが、決してそんなことはありません。登場人物には、子どもも大人もいるのですし、人間だけでなく天使や動物もいるのですから。「急に、劇をするように言われても、どうしてよいかわからない」と言う方もあるかもしれませんが、心配は無用です。要は、すべての登場人物が目指すところは一つ、飼い葉桶に寝かせられた幼子のいらっしやるところ、なのであります。

降誕劇を毎年のように見ている、気がつくことがあります。登場する者が皆、目的地にたどり着いたとき、ホッとした安堵の顔を見せるのです。飼い葉桶。そこに寝かせられた乳飲み子イエス。そこにたどり着いたとき、誰もが得られる安堵の気持ち。そこで与えられる、静かな喜び。降誕劇は、最後に登場人物全員がそろって飼い葉桶を囲んで、静かに終わります。飼い葉桶の乳飲み子。そこにたどり着くことの喜び。乳飲み子イエスを見いだすことの喜び。サンタクロースが登場したときの喜びとはまったく違う喜びが、そこにあることを、降誕劇を演じた者は、きっと心に覚えていくのではないのでしょうか。

わたしたちの願いは、間もなく迎えるクリスマスの祝いの一つひとつが、盛会に終わることではありません。エキサイトすることでもありません。この世界に生きる者として、この世界の中で神の御子を見いだすことの喜び。小さな飼い葉桶に寝かせられた乳飲み子として神の御子を見いだすことの、静かな喜び。その喜びを、一人でも多くの人と共に味わい、確かめたいのです。わたしたちの家族が、友が、隣人が、その喜びの集いへと導かれることを願うのです。

他の方を待つべき？

今日の御言葉は、救い主に先立つ先駆者の姿を示しています。福音書が示すのは、主イエスの先駆者と呼ばれる洗礼者ヨハネのことです。ただし、洗礼者ヨハネの物語といっても、ヨハネの最晩年、獄中の場面から始まる物語です。

洗礼者ヨハネは、主イエスよりも少し早く活動を始めた宗教家です。ヨハネは、当時のユダヤ人社会の中で、宗教家として絶大な人気を誇ったのです。その人気に恐れをなしたのが、ときの権力者ヘロデです。理由をつけて牢獄に入れたまではよかったのですが、ヨハネを支持する民衆の動きを恐れて、なかなか処刑することができませんでした。実際には、むしろ、ヘロデもまた、ヨハネの教えに耳を傾けないではいられなかったのです。ヨハネが牢獄につながれていたのがどれほどの期間であったのかは分かりませんが、主イエスの活動が知られるようになったのは、まさに、その頃のことでした。一人の人気の宗教家が捕らえられて、人々の前からいなくなった、そのときに、まさにその後を受け継ぐ後継者のようにして人々の間で知られるようになったのが、主イエスであったのです。

しかしながら、洗礼者ヨハネと主イエスとは、共通することと同時に、違うことも随分あったのです。ヨハネは、禁欲的な宗教家でした。食べるものといえば野蜜とイナゴ、着るものは獣の皮衣。およそ世捨て人のような姿で、神の裁きを語り、人々に悔い改めるよう求めたのが、ヨハネでした。一方で主イエスは、敵対する人たちから「大食漢の大酒飲み」と揶揄されるほど、社交的で、禁欲とはまったく無縁のような自由な生き方をなされた方だったのです。

ヨハネと主イエスは、お互いのことを、幼いときから知っていました。親同士につき合いがあったのです。そしてまた、長じてそれぞれに宗教家としての活動を始めてからは、恐らくお互いをもっともよく理解し、認め合う関係だったでしょう。けれども、ヨハネは、自分の最期を覚悟しながら過ごした獄中で、尋ね

たのです。「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか」。「自分が宗教家としてなしてきたことを完成してくれるのは、あなたでしょうか。自分が人々に教え、来るべきときに備えよと告げてきたことは、あなたによって実現されるのでしょうか。」

ヨハネには、迷いがあったのかもしれませんが。表面的な行動や振る舞いの仕方だけを見ても、主イエスは自分とは随分違ったのです。主イエスは、禁欲的な生き方をせず、自由に飲み食いを楽しんでいました。人々に悔い改めを強く要求するよりも、罪人と一緒に飲み食いすることを優先しました。神の裁きを強調するよりも、神の赦し、神の愛を語っていました。ヨハネは、もちろん、確信を持って自分の生き方を選んでいたのでしょう。しかし、だからこそ、自分の後に、自分の働きを完成してくれると思われた主イエスの、その教えや働き、行動や振る舞いが、あまりに自分とは違うことに戸惑うことがあったのではないのでしょうか。

「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければ…」。

わたしたちの心のどこかに、同じ問いがあるのではないのでしょうか。「来るべき方は、あなたでしょうか。わたしが期待していた方とは、どこか違うように思えるのですが。わたしがしてきたことと、あなたがなさることとは、どこか違うように思えるのですが。それでも、あなたをお迎えすべきでしょうか。」

わたしたちは、いつでも、自分の期待どおりのことが実現することを願うのです。期待どおりに神が助けてくださることを願い、そう祈る。いわば「請求書の祈り」をしている。主イエスに対しても、わたしたちは、自分の期待どおりであることを願い、自分の考えどおりであることを期待している。けれども、おいでくださる方は、わたしたちの期待どおりではない。願いどおりではない。

だからこそ、この乳飲み子をお待ちする

クリスマスに、わたしたちは、飼い葉桶に寝かせられた乳飲み子のもとに馳せ参じます。その乳飲み子を、わたしたちの救い主、御子キリストと信じて、その傍らに共に立たせていただく。

そうです。いったい、わたしたちは、乳飲み子に、どれほどのことを期待するのでしょうか。どれほどの願いを込めるのでしょうか。乳飲み子は、まだ何も為すことのない者です。わたしたちが語りかけても、何も応えないでしょう。どんなにあやしても、ニコリともしないかもしれない。ましてや、わたしたちと同じように考えたり、行動したりすることもない。ただ、わたしたちと共にそこにいる。そこにいて、しかし、これから始まる大きな可能性を、わたしたちに告げてくれるのです。それは、わたしたちの可能性ではない。わたしたちの期待でもない。それとはまったく違う、神の可能性です。飼い葉桶に眠る、神の期待です。

わたしたちがクリスマスの日にお迎えするのは、飼い葉桶の乳飲み子です。世の人々に先駆けて、この乳飲み子をお迎えする備えを為し、「この方をお待ちしましょう」と呼びかけるのです。そして、呼びかけに応えてくれた人々と共に、「あなたをお待ちしていました」と迎えます。ほかの何者でもありません。